

『原作 リム・カナン』

作：輪島貴史

夢より遠く、遥か彼方、光の行方にある世界、その世界の住人は不思議な力を持っていた、その手に触れたものに、ある魔法をかけると星になる、こうして人々は星空のアートを描いた

星を創り出す力の名は『リム・カナン』

その力は皆平等に備えてはいるものの、何でも自由に星へと変えられるわけではない
星にできるものは一人一人違う、砂を星に、花を星に、魚を星に、動物を星に
あの人にはできるのに、私にはできない、私にはできるのに、あの人にはできない
ゆえに『リム・カナン』そのものが、その人であり、心であるとされ
人は、人の『リム・カナン』を尊く崇めていた。

ある時、誰かがおこなった『リム・カナン』の星から、一つの彗星が落ちてきた
その彗星には人が乗っており、こう言った「この形の星を増やしてほしい」と

気に入ってもらえた人々は喜んで『リム・カナン』をおこない星を増やした

すると、その星々から、いくつもの彗星が落ちてきた、
その彗星に乗っていた人々はこういった「あの形の星が気に入らない、これ以上作るな」と

気に入ってもらえなかった人々は深く傷付き、作りたくても作らせてもらえず、
やがては力を失い、存在すらも失った

いつしかその世界の星空は大きく偏り、ただ、まぶしいだけの空へと姿を変え
星と星とがぶつかり合い、住人達もぶつかり合い、人が住めない世界になった

誰かが言った、「どこで間違えたのだろう」と

すると誰かがこういった「私があの時、あの人を星に変えたから」と・・・

『リム・カナン』は心と心が通じ合ってできる力

ゆえに、人によって、心の通りやすいもの、通にくいものがあった

それでも心が通じ合うなんて素敵な事、人は人のおこなう『リム・カナン』を敬い、
星はその人、そのものとして愛した

でも、私とあの人は愛し合ってしまった、あの人の星を愛すだけは哀しく足りない
そして、その手と手が触れ合い

私は『リム・カナン』をおこなう魔法、口づけをしてしまったから
あの人は星になった、星になったあの人はもうこの世界にはいない
いるのに、いない・・・私は悔やみ、悲しみ、切ない、満たされぬ思い

そして、なにより、なぜあの人が星となったのか、なぜ私も星になれなかったのか
あの人は私の心と通じていなかったのか、私があの人を心を通じていなかったのか

その思いが迷いとなった私は、心を通じてもないものにも口づけをした
だが、心の通じていない、ただの口づけのはずが『リム・カナン』となり、それらは星となった

だが、その星は、星であって星ではなかった、星の形をした別のもの
それが彗星となって落ちてきたのだ、それが全ての過ちの始まりだった

しかし、その世界の住人は、誰も責めなかった
嘆き、哀しみながらも、その『リム・カナン』を敬った

いつの日か、また、皆で、あの星空を見られる事を誓い
自分自身に心を通わせ、自らを口づけし、『リム・カナン』をおこなった
一人、また、一人と天空に舞い上がる中
最後の一人である私は・・・自分へ口づけするその瞬間に想ってしまった

自分が許せない・・・と・・・

自分自身と心を通わせられない魔法
それは偽りの『リム・カナン』となり、星の形をした別のものは
夢よりも遠い世界へと墮とされてしまった

いつも星になった時にこう思い出すのだ

「私は・・・何度、同じ過ちを繰り返しているのだろう」と

2016. 8. 30 作・輪島貴史